

2011
冬号

No. 6

2011年12月31日

こわち

自治研

発行

高知県自治研究センター

780-0862

高知県高知市鷹匠町2-5-47

TEL (088) 822-6460

FAX (088) 822-6460

編集者 石川 俊二



高知県自治研究センターは、10月6日に46人の参加のもと、高知共済会館においてセミナー「現代における危機と再生」を開催しました。

講師の内山 節さんからは、ご自身の日常から経済学者マルサス、ヨーロッパ来訪等を通じて、東日本大震災をめぐる日本人と日本についてなど、深い思索に基づきお話いただきました。その模様を報告します。

講師
哲学者・内山 節さん

現代における危機と再生

セミナー開催

東日本大震災から新たな再生を期して

講演より(要旨)

—司会者からの東日本大震災及び南海大震災についての話を受け

三陸地域について言うと、大体百年に一遍ぐらい大きな津波が来ています。地域にはいろいろな伝承があり、もう少し伝承を守っていれば、ここまで大きな被害にならなかったということでもあります。

三陸地域について歴史から見ていくと、津波が来て、人々が高台に引越して、このことを繰り返してきたのですが、だんだん人口が増えてくると下の方に住むようになっていき、伝承もすっかり伝えられなくなつたということでもあります。そういう問題と、原発事故故という、我々からすると全く初めての出来事と言っ

てもいい大きな出来事が起きてしまいました。特に原発の問題になりますと、我々がつくってきた文明自体が私たちの文明を壊していくという現象を生んでしまつて、問題とどう向き合っていくのかが、かなり重要なことになってくるのだらうという気がいたします。

うちの村(群賢下野村)

漢方薬の原料を出している家が何軒かあります。原料として出荷する朴の木は皮は、放射性濃度が高いので売れない。胃腸薬に使うキハダは外側の皮をはがして内側の皮を漢方薬の原料として使う。これはセシウムが出てきてないので、まあいいかなという感じになっています。キノコについても、村の木の外側をむかなくて使った菌床からセシウムが出ました。国の基準値よりはるかに低いのですが、「上野村のキノコからセシウム」などと報道をされてしまつと、これは全く駄目になってしまいます。内側の部分だけを原木に使って

いくやり方であればまあまあ大丈夫とか。私の所は相

当離れているのですが、そういう問題があります。今、天然キノコの最中ですけれども、ちよつと食べるのには勇気が要るといいいますか、かなりの人が今年には放棄という感じになっていきます。



内山 節さん

経済学者マルサスの「人口論」について

1700年代の終りごろ、イギリスに経済学者でマルサスという人がいました。「人口論」という本が大変有名で、今でもロングセラーで読まれています。「文明の発展は人口の増加をもたらす。ところが、人口の増加をもたせられても農業は生産力をあまり拡大しない。結局、最終的には食料問題が起きてくる」ということを書いただけの本です。

この本が出たときに、まだ灌漑(かんがい)などをやれば農地は増やせるとか、農業技術を改良すれば生産

力を上げることができるとかの反論は出るので、この問題に関してはマルサスが言っている方が正しいわけです。ある程度農地が増えたり、ある程度生産力が増えたとしても、無限には増えていけないわけで、いずれどこかで困難に直面するところでは間違いない。

資本主義がエネルギーを持つためには絶えず技術革新があつたり、いろんなイノベーションを展開しなければいけない。そうすると生産性は上がるわけですが、全体のパイが拡大していかないと必ず失業問題などが起きてくる。生産力が上がらない状態で技術革新だけが進めば、当然労働力だけがそれだけ要らなくなつて必ず失業問題が起きてくる。

失業者が増えれば、失業した人たちが買えないではなくて、失業してない人たちも予防的に節約することか、ちよつと行動を止めることになり、たちまち市場を縮小させる。これは悪循環になって大混乱を招く。資本主義は、一面でこういう仕組みを持っているわけです。